

# 保育への視座(4)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

保育の実際を見せていただくことは私にとって、とても得がたい研修体験の機会になっ

ていがある。当然、保育環境の中の一人であることは言うまでもない。

なっていてありがたいと思っているが、その反面保育の状況に何らかの影響をもたらしている一つの要素ともなっていることも見逃さない事実で、実際の現場では、子どもたちに対してはできるだけ明るく笑顔で接すると共にできるだけ保育者の心をくみとろうと努めて参加させてもらっている。参観者といえども単なる傍観者であってはならないという思

いがある。Y幼稚園で朝から保育を参観させてもらって午後幼児たちが帰ったあとの研究会で、担任のY先生が提示されたR子の指導事例から私の参観が幼児への影響だけでなく担任の先生へも大きな影響を与えていたことを聴いて、はっとさせられたことがある。またそのことからその担任の先生の日頃からひとりひとりの幼児たちにむけられて来た心のまなざ

しの深いことやその先生の感受性のすばらしさに感服したものである。

その時のY先生のお話を要約すると――

朝からあっちこっちの遊びに移り変わっていたR子を見ていて、友だちと一しょに遊びたいのかな、大きな子もたちと同じことがしたいのかな、遊びが見つからないのかな、私（担任）と遊びたいのかな、などとあれこれ推察したりはしていた。しかしその時はバス遊びをしている子どもたちの中にいたのでバスに乗りながらR子の姿をときどき追ったりしている、R子が河辺先生のそばへ行つて一輪車に砂を入れてうれしそうに先生と話し合っている。河辺先生のにこやかなほほえみにR子もほほえみながら何かしきりに自分の思いを伝えている。聞いてもらおうとしている姿として受けとめられた。その時ハッと。そうかR子はこれを求めていたのだ、

担任の私が、いる、そのことだけではない。誰かとじっくり、自分とのかかわりの時間、雰囲気、状況を共有したかったのだと思つた。……

そのあと砂で遊んでいるR子のところへ行き、私（担任）「R子ちゃん何つくっていたの？」R子「かき氷」私「先生ね、バスにのっていっぱい遊んだからのどがかわいて暑くなっちゃった。R子ちゃん、かき氷たべさせてくれる？」R子「うんいいよ」そう言つて紙コップに砂をいれて私にさし出してくれた。しかしスプーンがない私「これだと食べられないね、かき氷になにがあるといい？」R子「スプーン」私「そうだね、スプーンがあるときくえるね」早速スプーンを廃材庫からとつて来てそれを使って私がR子の耳もとでサクサクと音を立てながらかき氷を食べた。その時、R子が、「あつ、かき氷の音が

する」R子は砂にスプーンをつきさして水をまぜている音に対して、「かき氷の音」を発見した。私は「R子ちゃんいいことに気がついたね。本当にかき氷の音がするね。そうだこの音、R子ちゃんの発見、クラスのみんなにも教えてあげようか。」R子「うん」R子とかき氷の音をサクサクサクと立てながらしばらく二人だけの時間を共有することができた。私はその時R子とそうすることがR子にとって本当に大切なことなのだと思う。

その時私の中には活動をどう発展させようかとかどのようなことばかけをするのがよいかなど何もなかった。ただ今しているR子の氷とその音への気付き、そのサクサクの音を一緒に二人だけの世界の中で聞いていたかった、と。そしてつづけて、ひとり遊びをしている子どもたちが気になり私たちは教師が媒介となりながら周りの子どもたちに気

づかせたり、その子どもが周りの子どもたちに少しずつ近づいてくれるようにねがったり、それをどうすればよいかを考えたりしがちだが、その以前にもっとその子がいまここでその子の見つけたことを教師と二人で共有してその世界にひたること、がいかに大事であるかを知ることができました。と、

(そのあとR子はクラスのみんなに「まほうのかき氷。砂なんだけど、本当の氷と同じ音がするよ。聞かせてあげるね」と小声でひとりひとりにきかせてたのしんでいたようである)

このY先生の指導事例からうかがえるように、ひとり遊びをするR子のような子どもに対して、ゆったりとした姿勢でその子の時間を過ごされることの大事さに気づいて下さったことはその時の参観者としてそこに居合わせたことをとてもうれしく思った。又このよ

うに子どもも担任も参観者も三者共々に存在感を感じられるような保育なり、研修ができればとも感じた。これは常日頃、担任以外の園長先生や主任の先生方が保育の中に入られる場合も同じことが言えると思う。

ところで一学期も終盤にさしかかる頃になってまだ幼稚園生活に慣れ親しめない子どもたちが何人かいることがある。

親と離れにくい子、離れはしたが、保育室や廊下、テラスのところから動こうとしない子、が目につき気になる。その時、多くの先生は、四月、五月、六月と一日も早く幼稚園生活に慣れ親しんでほしいとねがわれ、その方向であれこれと苦勞される様子を見聞する。

手を引いて誘い出したり、友だちをつくってその子どもに誘うよう指導されたりする。

特にやっとなテラスで自分でひとり遊びがで

きるようになったのを見ると、もう次のステップをと考えて、砂場などへ誘い出すことを考えてしまわれるが、私はこのような子どもに対してこそその時その場の時間を二人で過ごして下さることがとても大切なことだと思ふ。

母親から離れにくい（登園をいやがる子どもも含めて）ような子どもについても、「その原因がなにか」とか「それは自我の発達が云々」といったこと以前に、親も教師も「幼児は成長しようとする力を秘めてもっている」ことへの理解がどうなっているのかをお互いに自問自答していただきたい。「一日も早く幼稚園生活に慣れ親しんでほしい」ねがいをもちつつも、この子は「いま、ここ」では「どうありたいと思っているのか」に焦点をあててその子どもの心により添ってあげてほしい。テラスのところにじっと立ってばか

りの子どもに対しては、その心もちはどんな老練な先生にも見えるのはいまそこに立っている事実のみであろう。そして、その時その場の心は不明であろう。その時例えば「ここでみていたいのかな」という声かけはその子ども

の心に寄り添うことの姿勢から出ることはかけであろう。「もしそこでみている方がよければそのままでもよいよ。」とあるがま

まを認めることによってその子は少しずつ緊張した気分から解放され、自由感を味わうようになり、そのことができてはじめて「成長しようとする力」が少しずつ働き出すのであることはすでに大学等で学んでこられている筈だと思うのだが、なかなかこのことが実践されていないのを残念に思う。

子どもたちは、どのような状況にいても常に自分自身が一人の人間として尊重されているかどうかを敏感に感じとっているのだということを銘記しておいてほしい。

早く次の段階への発展とか、こうあってほしいという親たちや教師たちのねがいやねらいは大事だが、ややもすると、この子ども達

が「尊重されているかどうか」の一点が欠如し易いのではないだろうか。

(元・洗足学園短期大学)

